

滋賀大学経済学部附属史料館 にゅうす

2015・10・13

S・A・M



No.43

史料を遺す

本年度の秋季企画展は、春季に引き続き湖北の村（菅浦）の史料を紹介します。この村の中世文書は国の重要文化財に指定されています。高校時代に日本史を選択した人なら誰でも中世後期の単元で惣村・郷村のことを学んだと思います。そのさいに事例として取り上げられた惣村は、恐らく菅浦や今堀（東近江市）だったはずで、資料集や図録でもこれらの村のものが引用されていたことを記憶しているでしょうか。実はこれらの史料群は、本史料館が地元のご好意でお預かりしているものです。惣村・郷村の歴史は、近江国の史実をもとに明らかにされたことなのです。科学技術の発展が人々の暮らしを便利にすることは、疑いを容れませんが、一方で、およそ形あるものは、いずれ風雪にさらされて衰滅することは自然の摂理だといえます。少し事例としては相応しくありませんが、PCは日常生活にとって欠かすことのできない程に普及しました。しかし、OSの度重なるバージョンアップは、普通の生活者にとって本当に必要なことだといえるのでし

ようか。それは、企業のあるべき利益欲からもたらされているのではないのでしょうか。

かつてMS社のビル・ゲイツ氏が、「コンピュータの発達は、人を幸福にしたのでしょうか」と問われ、絶句した場面をTVで見た記憶があります。彼は、多分、生活を利用することに貢献したのは事実ですが、社会に情報の非対称性を増大させ、大きな格差を生み出してしまったこと、それは決して幸福な暮らしをもたらさなかったことを、自覚していたのだと思います。その限りでは幸福に寄与したと言いつのる強欲者ではないのでしょうか。

和紙に墨で書かれた文字は、千年後も消えることなく残りまします。羊皮紙に書かれた文字は、いずれ皮紙の劣化とともに衰滅します。ましてや酸性紙に万年筆で書かれた文献は、鉄分の酸化にともない文字が抜け、紙も粉碎されていきます。デジタル保存された資料も、その保存技術は、まだ確立されていません。

人類が経験したさまざまな事象を後世に伝えることは、口伝だけでは不可能でしょう。やはり文字で書かれた一次史料（古文書）を保存していくことが、二一世紀においても必要不可欠なことだと思えます。その意味で、菅浦文書を大事に保管し後世に伝えてきた村人の見識にあらためて敬意を抱く次第です。同時に、これまでのように歴史家が古文書を解読する時代から、新しい科学技術を導入して史料の利用と解析が試行される日も近いという実感もあります。

（附属史料館長 宇佐美英機）